



企業編



株式会社テクノ

安岐町下原1383番地3
設立 昭和56年12月 従業員 185名

株式会社テクノは、大分空港が安岐・武蔵両町の海岸部に移転開港し、空港

近くに多くの企業が進出してきたことにより、地元の人を雇用する場を設ける目的で創業者の藤原康男さんがメンテナンズ会社として設立しました。
当初は、工場内の清掃や警備業務を行っていましたが、取引先の要望に応じて部品の保管管理などもするようになり、その後物流業や運送業に移行していきました。
テクノで行っている物流業は、納品代行業務といわれるもので、発注元の製造業者と発注先の部品製造業者の間に入り、製造業者に代わって部品の保管と管理を行い、必要に応じて部品を納品するものです。部品管理のために、物流

センターを県内に4箇所、県外に1箇所新設しました。また、部品保管のために、空港や港、工場まで部品を取りに行く運送業を行うようになり、トラック40台を所有しました。こうして、物流業と運送業の両輪で事業を拡大してきました。しかし、平成20年頃からは物流と運送の仕事が減少していき、社員の雇用を守るためにも新規事業がないかと探していたところ、国東町田深に縫製工場の跡地があり、縫製設備もそのまま使え、その工場に働いていた職員を確保したこともあり、縫製業に進出することにしました。しかし、社員の技術力不足等で、なかなか軌道に乗りませんでした。そこで、打開策として製造する製品を大手学生服メーカーの上着に絞ることにしました。ベトナムからの研修生を受け入れ、年間3万着の学生服の上着を製造するようになり、今では縫製業はテクノを支える主要な事業に成長しました。
今後は、運送業者としてこれだけの物流倉庫を所有する会社は数少ないので、その特性を活かした物流・運送の形態を生みだしていきたい。そして、縫製業において、地元の人たちの雇用を拡大していきたいそうです。



▲小城物流センターの出荷作業場



▲完成品の最終チェック

認定 農業者編



田中 徹治さん
博子さん

国見町中
広大な農地を夫婦で守り育てる

田中徹治さんは、幼馴染の博子さんと結婚した当時、運送会社に勤めながら

米を作る兼業農家でした。運送会社を辞めた後、農産物などの卸しをしている会社で働いているときに、ミニトマトの需要が高くなっていることを知りました。また、周りでも多くの方が栽培を始めていたので、これからミニトマトの時代が来ると考え、専用のビニールハウスを建てて専業農家になることを決めました。徹治さんが育てるミニトマトは、永田農法という「肥料及び水を必要最小限に抑えて栽培する方法」を更に改良した独自の栽培方法です。通常のミニトマトより多くの栄養を持ち、野菜特有のアクが少ないそうです。そのようなため学校給食に使われるようになり、その後国見町のスー

パーや道の駅にみ、夢咲茶屋などへ販路を拡大することができました。



平成8年、東中地区の農地利用組合の組合長に選ばれ、専属のオペレーターを引き受けることになりました。耕作ができなくなった人達から田んぼを預かり、併せて作業受託も依頼されるようになりました。田んぼ12・5ヘクタールに加え、5ヘクタールの作業受託をするようになり、ミニトマトの栽培までとても手がまわりません。そこで、ミニトマトの栽培は、博子さんが担当することになりました。博子さんは、「急に栽培を任せられても困りました。が、うちのミニトマトをおいしいと言ってくれた人がたくさんいました。以前のようによくさんは栽培できないが、うちの味をしっかりと守っていくために頑張っています」。徹治さんは、「妻にミニトマトを任せたいのは申し訳なかったが、自分の生まれ育った東中地区の農地をどうしても守りたかった。いま管理している農地は、あと10年は自分がしっかりと守っていきたい。農業を取り巻く環境は厳しいので、その後どうなるか分からないが、この地域の農地を守ってくれる若者が出てきてくれることを期待している」と語っていました。



をどうしても守りたかった。いま管理している農地は、あと10年は自分がしっかりと守っていきたい。農業を取り巻く環境は厳しいので、その後どうなるか分からないが、この地域の農地を守ってくれる若者が出てきてくれることを期待している」と語っていました。

林業・水産業編



森 恵一さん
公子さん

武蔵町志和利
20年前から植林活動に取り組む

森恵一さんは、中学校を卒業してから、体の弱かった父に代わり米や野菜などの

の農業を営んできました。母と祖母との3人は人手も足りず苦労も多くありましたが、結婚して妻の公子さんも加わり、米や七島イ、お茶など幅広く農業ができるようになりました。
昭和36年頃になって、武蔵町で行われた国営・県営パイロット事業に参加し、ミカン山を1・6ヘクタール造成しました。恵一さんと公子さんは、ミカン栽培に力を入れ、その後20年間はミカン栽培が生活の主流になりました。しかし、そ



の後のミカン価格の下落などにより、やむなくミカン栽培を辞めることになりました。当時は、周りの人も同じような状態で、パイロット事業でミカン山に造成された一帯は、放棄地と変わっていききました。その光景を見た恵一さんは、「このまま山が荒れていく姿をみているのは耐えられない。どうかしたい」と考え、シイタケ栽培をすることを決意しました。

最初に、コマを打つためのクヌギとコマを打ったクヌギを寝かせるためのスギを植えることから始めました。シイタケ栽培をする合間に、スギとヒノキを植えていき、4年前に1・6ヘクタールの土地への植林が完了しました。公子さんは、「主人は、山が好きだから午前中は山に行き下草を刈っています。しかし、年々足腰が弱ってきているので、そろそろ辞めたい方がいいのではと心配しています」。恵一さんは、「毎日山に行くと、木が成長していく姿をみるのが嬉しい。私も妻も年を取ってきたので、そろそろ山での仕事は難しくなってきました。一緒に住む娘夫婦がいつでも山の管理ができるように今はその準備をしています。もうすぐ娘夫婦も仕事一段落するので、私達が今まで育ててきた山を託したい」と優しい眼差しで語っていました。



▲今年植えた杉の世話をしている様子